

## 1. テキスト

「内部知覚について」 87 頁後ろから 4 行目から 91 頁後ろから 5 行目まで。

## 2. テキスト要約

「知る」（自覚）において、「知る我」（直観に基づいて成立自己）と「知られる我」（反省に基づいて成立自己）が合一している。そこで、西田は自己の矛盾的事実を見ている。この矛盾とは「超越」と「内在」の矛盾であって、「直観」と「反省」の矛盾であると考えられる。その点について、西田は「矛盾は思惟（反省を超越した作用・直観）すべきものを見ようとする（対象化する・反省）所に潜んでいる、しかもこの解き難い矛盾即ち自己の存在である」と述べている。そして、西田は「自覚」の成立の事実を根拠に、我々の自己において「感覚の世界」（知られる我の世界）と「思惟の世界」（知る我の世界）が結合すると主張する。つまり、「自覚」において、知る我が同時に知られる我であり、直観と反省が統一されるのである。

かかる「自覚」の事実は「現在」においてのみ考えられる。西田は「自己は現在に於て自己自身と合一すると共に、自己を超越しているのである」と言っている。「現在」とはいわゆる「時」において対象的に「達することができない」「極限点」であり、時間、空間といった範疇を超越した「対象化することができない自己の深い奥底」である。西田は、さらに「如何にして我が我自身を維持し、物の映像が我に於て互いに関係するであろうか」という問題を論ずることを通じて、「現在」とは如何なるものであるかを明らかにしようとした。この問題は言い換えれば、我（作用としての我、知る我）が如何に我（作用）を維持していながら、我において作用の対象（物の形や色などの表象、ある意味で知られる我の意識）を統一するのかという「連続の問題」が論じられている。この問題はまた「自己の或一点から他の一点への推移は如何にして可能なのであるか」という問題であると考えられる。

西田はまず「一つの表象が一つの表象に变ずる」場合、その間に我に「变ずる点」があり、しかもそれは現実において「見られる点」ではなく、「考えられる点」であるという普通の考え方を挙げている。「变ずる点」は見られなくとも、一つの現象から一つの現象に变ずる時、そういう点を通なければならない、ゆえにそれは「非現実的と言われない」と西田が批判する。次に、西田は「变ずる点」を客観（現実）の中ではなく、我々の主観・自己の心の中に求めるという考え方を挙げている。しかし、「連続の問題」を外においても内においても、前述した矛盾を解決することができない。（なぜなら、二つの現象を結合する統一がはっきり出でおらず、自己が自己を維持できないからである。）そうして、西田は一つの現象から一つの現象への推移の間には「二つの意識内容が消えても而も内面的に結合している零点を通らなければならぬ」と述べ、この点は「実在的」でなければならないとしている。

「零点」は零点と呼ばれる理由は、二つの点の「いずれか一つから見れば無と考えられる」からである。しかし、それは実は「高次的には両方の内容を含んだものと考えざるを得ない」とされる。こうして、「零点」はある意味で「空間」であると考えられる。先と同様に、一つの空間（赤）から一つの空間（青）に变ずる時、両方の空間が実在的である上で、実在的空間を通らなければならない、しかもその空間はなお何らかの色を有っているに違いない。「我々が色の推移を見る時単に色を見るという意味において見ることのできないものを見ている」とされる。この見ることのできないものは「統一」である。物を見るという場合、我々は実は「種々の性質の統一」としての物を見ているのである。同様に芸術作品を見ている場合、我々は実は「意味の統一」を見ているのである。かかる統一は、主客が分離している上での半面の統一（主観的統一、客観的統一）ではなく、「部分でありながら全体の意味を有っている」「内面的統一」である。「真の客観的統一」はこれによって成立するのである。

「物の統一点と、主観的なる注意の統一点とはまったく関係がないもの」という主客分離に基づく考え方に対して、西田は「具体的意識現象に於て内容と作用とは離れたものではない。意識の統一点、即ち注意の焦点であって、別に注意作用というものがあるのではない」としている。つまり、内容自身が力（識別力）を有しており、「内容そのものが働くと考えなければならぬ」。普通には「対象界の統一点」とこれを見る「主観」、「対象其のものの統一と自己の意識の統一とは、異なったものと考えられているが、意識内に於て一つの意識から他の意識に移る界に、「客観的統一」、「高次的統一」がなければならないと西田が批判する。さらに、西田は「外に客観的統一と見るものも、具体的なる主観的統一であり、主観的統一の基にも、客観的統一がある」としている。かかる統一の極致に於て、「主客合一して一つの具体的統一となる」。それで、西田は「主客合一」の具体的「統一点」が「現在」であるという結論に到達した。

種々の世界は「現在」を中心として推移し、この現在において統一せられている。その意味で、「現在」とは「すべての経験の最も具体的なる統一点」であり、「全体験の総合点」である。我々は経験がどれほど進むとしても、現在の一点に離れることがない。同様に、我々はいつも現在にしながら、現在に到達することができない。

3. 哲学的問い：誰でも良心の声を聞こえるのか。人間にはその声に従うか従わないかのを決める自由があるのか。